

第四四回

全国中学生人権作文コンテスト

岡山県大会作品集

岡山地方事務局
岡山県人権擁護委員連合会

第44回全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会表彰式
日にち:令和7年12月6日(土) 場所:さん太ホール



人権イメージキャラクター
人KEN あゆみちゃん



人権イメージキャラクター
人KEN まもる君

金馬会長、慶田元さん、宮崎さん、正木局長

は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会では、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が、人権問題について作文を書くことにより、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身に付けることを目的として実施しており、本年度は四四回目となり、この趣旨に従い、岡山地方務局と岡山県人権擁護委員連合会においても、「第四四回全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会」を実施しましたところ、県内一一六校から四、八四二編という多数の作文が寄せられ、このうち最優秀賞（岡山地方務局長賞）の作品を中央大会へ推薦することができました。

応募作品は、自分自身の経験に基づいたものや様々な人権問題を中学生らしい純粋な視点から自分自身の問題として真剣に考えていこうとする意欲あふれるものばかりでした。また、無意識の偏見や、戦後八十年ということもあり平和をテーマとする作文が見られました。人権の世紀とも言われる二一世紀をまさに生きるこれからの若い世代が今後どのように成長し

ていくか、非常に楽しみに感じます。

この作品集は、全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会の入賞作品十五編を収録したものです。この作品集が、中学生だけではなく一人でも多くの人の目に留まり、読まれ、今一度身近なことから人権を考えていただく契機となれば幸いです。

おわりに、この人権作文コンテスト岡山県大会の実施に当たり、熱意を持って参加してくださった中学生の皆さんを始め、ご支援を賜りました岡山県教育委員会、山陽新聞社、NHK岡山放送局、岡山シーガルズ、岡山湯郷Beile及びファジャーノ岡山、また、多大な御支援と御尽力を賜りました各中学校の関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

令和八年二月

岡山 地 方 法 務 局

岡山県人権擁護委員連合会

第44回 全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会応募状況

協議会名	応募校数	応募総数	岡山県大会への推薦作品数
岡山	29	1,108	3
備前	7	121	1
倉敷	31	1,053	3
笠岡	16	573	2
高梁	11	172	1
津山	22	1,815	5
全体	116	4,842	15

第44回 法務省人権擁護局長・全国人権擁護委員連合会長感謝状贈呈校

岡山市立西大寺中学校 美作市立英田中学校
赤磐市立赤坂中学校 新庄村立新庄中学校
倉敷市立黒崎中学校 岡山白陵中学校
高梁市立川上中学校

法務省人権擁護局と全国人権擁護委員連合会では、長年にわたり多数の生徒からの応募をいただいている中学校に対し、日頃の熱心な取り組みに敬意を表し、感謝状を贈呈しています。

第44回 全国中学生人権作文コンテスト 岡山県大会 審査結果

最優秀賞

作 品 名	学 校 名	学年	氏 名
岡山地方務局長賞			
「違い」は「壁」ではなく「橋」	岡山白陵中学校	1	宮崎 りの
岡山県人権擁護委員連合会長賞			
ヘルプマークの存在	岡山学芸館清秀中学校	2	慶田元 杏

優秀賞

岡山県教育委員会教育長賞			
「理解は優しさの第一歩」	ノートルダム清心学園清心中学校	3	藤川 莉緒
わたしの中の小さな違和感	岡山市立高島中学校	2	池山 結彩
株式会社山陽新聞社長賞			
違いを認め合うということ	津山市立中道中学校	2	匿名
怖い言葉と自分の後悔	匿名		匿名
NHK岡山放送局長賞			
セルフレジと高齢者	津山市立久米中学校	2	小田将大朗
「こんにちは！你好！ミンガラバー！」	矢掛町立矢掛中学校	2	藤枝 季菜

スポーツチーム特別賞

岡山シーガルズ賞			
大切な友	倉敷市立真備中学校	3	平松 俊斗
将来の可能性を信じて	井原市立井原中学校	3	久安 歩未
岡山湯郷Belle賞			
自分らしく	津山市立中道中学校	3	木多優妃乃
今日も誰かが大丈夫と嘘をついた	真庭市立久世中学校	3	三船梨々華
ファジアーノ岡山賞			
ボランティアで気づいた大切なこと	新見市立大佐中学校	1	栞村 大翔
本当の気持ちに気づいた日	匿名		匿名

奨励賞

「自分らしく」でいいじゃん	倉敷市立玉島東中学校	2	滝澤陽奈乃
---------------	------------	---	-------

第四回全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会審査員

株式会社山陽新聞社論説委員会
(審査委員長)

副主幹 中浜隆宏

岡山県教育庁人権教育生徒指導課

総括副参事 鳥山 順

岡山県人権擁護委員連合会

会長 金馬健二

岡山県人権擁護委員連合会
こども人権委員会

委員長 木元妙子

岡山県人権擁護委員連合会
こども人権委員会

委員長 片山典子

岡山県人権擁護委員連合会
こども人権委員会

副委員長 平川公之助

岡山地方務局

局長 正木開志

(敬称略)

目 次

【第四回全国中学生人権作文コンテスト岡山県大会入賞作品】

最優秀賞

○岡山地方事務局長賞

「違い」は「壁」ではなく「橋」……………岡山白陵中学校 一年 宮崎りの……………1

○岡山県人権擁護委員連合会長賞

ヘルプマークの存在……………岡山学芸館清秀中学校 二年 慶田元杏……………3

優秀賞

○岡山県教育委員会教育長賞

「理解は優しさの第一歩」……………ノートルダム清心学園清心中学校 三年 藤川莉緒……………5

わたしの中の小さな違和感……………岡山市立高島中学校 二年 池山結彩……………8

○株式会社山陽新聞社長賞

違いを認め合うということ……………津山市立中道中学校 二年 匿名……………10

怖い言葉と自分の後悔……………匿名……………13

○NHK岡山放送局長賞

セルフレジと高齢者……………津山市立久米中学校 二年 小田将大朗……………15

「こんにちは！你好！ミンガラバー！」……………矢掛町立矢掛中学校 一年 藤枝季菜……………17

スポーツチーム特別賞

○岡山シーガルズ賞

大切な友 ……………

将来の可能性を信じて ……………

○岡山湯郷Beile賞

自分らしく ……………

今日も誰かが大丈夫と嘘をついた ……………

○フアジアノ岡山賞

ボランティアで気づいた大切なこと ……………

本当の気持ちに気づいた日 ……………

倉敷市立真備中学校 三年 平松俊斗 …… 20

井原市立井原中学校 三年 久安歩未 …… 22

津山市立中道中学校 三年 木多優妃乃 …… 25

真庭市立久世中学校 三年 三船梨々華 …… 27

新見市立大佐中学校 一年 栗村大翔 …… 29

匿名 …… 31

奨励賞

「自分らしく」でいいじゃん …………… 倉敷市立玉島東中学校 二年 滝澤陽奈乃 …… 33

最優秀賞受賞者へのインタビュー

宮崎りのさんへのインタビュー …………… 35

慶田元杏さんへのインタビュー …………… 39

審査総評

山陽新聞社論説委員会副主幹

中 浜 隆 宏

最終審査に残った十五編について、岡山県人権擁護委員連合会、県教育庁などの七人で審査しました。評価に当たっては、中学生らしい感性に富み、純粹な感覚で人権問題を捉えていることなどを審査基準にしました。

県大会への応募作品は昨年度より七百編余り多く、最終審査の対象も秀作ぞろいでした。各作品に対する審査員の評価も僅差で、難しい選考だったことを記しておきます。

最優秀賞に選ばれた宮崎りのさんは、ラジオで耳にした「ジェンダー平等」の公共CMをきっかけに、自分の中の思い込みに気づきました。さらに考えを深めて「何の根拠をもとにそう思ったのか」と自分に問うことを忘れないようにしたいと記しました。

もう一編の最優秀賞の慶田元杏さんは、渋々つけていた「ヘルプマーク」のおかげで救われた経験があるそうです。その後、困っている人を助ける意思を示す「逆ヘルプマーク」もあることを知り、二つのマークの存在を伝えていきたいといいます。

どちらも共感できる内容であり、人権を尊重し、思いやる心とともに、さらに積極的な行動に移す歩みが感じられる作品です。文章の表現も適切で、読み手に考えがよく伝わります。

このほかの作品も、身近に暮らす外国人との共生や、障害のあるきょうだい、友人との関係、「セルフレジ」に戸惑う高齢者への配慮など、内容は多岐にわたり、興味深く読みました。自らの体験を通して得た考えを、中学生らしく素直につづってありました。

これからも書くことを通して考えを深め、他の人の立場に立ち思いやれる次代の担い手に育ってくれるよう期待します。

「違い」は「壁」ではなく「橋」

岡山白陵中学校 一年

宮崎りの

「え、どういうこと。まさか。」

ある日、車の中で聴いていたラジオで、私はショックを受けた。

「パイロットになる夢を発表する子どもがいます。キッチンで夕食の支度をする人がいます。」

続きは、

「あなたが想像したのは、男性の姿ですか。それとも女性の姿ですか。」

その時、私ははっとした。私の頭の中にはパイロットの夢を語る男の子と、キッチンに立っている女性が当たり前のように頭に浮かんだ。

私はこの時まで性別や見た目で人を判断したことがなかったと勝手に思い込んでいた。小学校の道徳

の授業で、「好きな色や好きなことは、誰が何を好きでもいい」と学び、実際に生活の中では、「男の子だからこうするべき」「女の子ならこうあるべき」という考えはおかしいと感じていたからだ。

しかし、このラジオの問いかけで、自分の心の奥に、気づかないうちに入りこんでしまっている思い込みがあることを知った。心の中で無意識の線引きをしていたのだ。

家族で訪れたお寿司屋さんでも、同じようなことがあったのだ。その中でお寿司をにぎっていたのは日本人ではなく外国人だった。『大丈夫かな。』と心の奥に不安がよぎった。しかし、すぐにその思いは消え、実際に味わったお寿司の味はとてもおいしかった。私が見ていなかったのは、見ためや国せきの向こうにある、長い時間みがかれた技と努力だった。あの時、私の視点をじゃましていたのは、その人のはだの色、外国の方であることではなく、私の心の中に知らず知らずのうちにすみついた偏見だった。

このような無意識の偏見は、自分でも気付かないうちに芽生える。文化やニュース、会話の中で積み

重なった当たり前が知らないうちに自分の心の中に
ふり積もる。それが固定観念となり、偏見は、相手
を不当に評価したり、可能性を奪ったり私たち自身
の視野を狭め成長もさまたげる。例えば私が「女の
子だから理系は向かない」と思い込んでしまえば本
当は得意かもしれない分野を最初からあきらめてし
まうかもしれないからだ。

無意識の偏見をなくすことは、簡単ではない。む
しろ、「自分は差別をしない」と信じているほど、
気づきにくいのもかもしれない。だからこそここで、
「それは事実か。」「私は何の根拠をもとにそう思っ
たのか。」と自分に問うことを忘れないようにした
い。重要なのは、「自分は差別しない人間だ。」と思
い込まず、常に立ち止まって自分の考えを見つめ直
す姿勢だと思う。もし、あのラジオを聴かなければ、
私は今も自分が見た目や性別だけで判断してしま
う時があることに気づかなかっただろう。あのお寿司
屋さんでの経験がなければ、私は、「国せきや外見
と技術力は関係ない」という当たり前の事実を実感
できなかったらと思う。

これからの社会は、ますます多様になる。性別、
国せき、文化、宗教、価値観など、違いは無数にある。
その違いを理由に誰かを否定する社会は、きつと息
苦しい。一方で、お互いを受け入れ、尊重し合える
社会は、誰もが自分らしく生きられる場所になる。

だから私は、自分の中にある無意識の偏見を見逃
さないようにしたい。そのために、情報をいろいろ
な視点で見て考えるように心がける。誰かを決めつ
けてしまいうようになった時は、根拠や理由をしっか
り考え直すという習慣を身につけるようにする。

「正しい目」とは、人を正しく分類する目ではな
い。それは、人の努力や可能性を見逃さない目、人
を理解し受け入れ、尊重し合う目だと思う。私はこ
の目を持ち続ける人でありたい。そして、この「正
しい目」を持つ人が一人でも多くなれば、社会は必
ず変化するはずだ。違いを壁ではなく橋に変える人
が増えれば、偏見にしばられる「夢」はなくなり、
本当の意味で「誰もが自分らしく生きられる社会」
が実現する。

私は、その未来が実現することをただ願うのでは

なく作る側に立ちたいと思う。だから、これからも自分の心の中にある思い込みを外していき、正しい目を持つ人間であり続ける。その小さな一歩が誰かの可能性を守る大きな一歩になると信じている。



最優 秀賞（岡山県人権擁護委員連合会長賞）

ヘルプマークの存在

岡山学芸館清秀中学校 二年

慶田二元 杏

「今日からこれを付けてね。」

そう言われて去年、私は母からヘルプマークを渡された。ヘルプマークとは、外見では分かりづらくても援助を得やすくする為のマークのことらしい。私はこのヘルプマークがあまり好きではなかった。私は慢性炎症性脱髄性多発神経炎（CIPD）という難病を患っている。この病気については何度も説明してもらったし、自分でも調べたりしたので、どういう病気かは分かっている。交通機関を使う場合には必要なことや、外見では判断しにくい病気であることから、ヘルプマークを持っていた方がいいということも分かっている。分かっているがどうしても付けたくなかった。付けてしまったら、自分は「障

「がい者です。」と言っているようなものだからというのが主な理由だ。私は自分が難病を患っていることを知られたら周りの人の態度が変わるのではないかと考えてしまう。ヘルプマークを付けていたら、多くの人達に自分が健常者ではないことが知られてしまう、そう思うと「付けておきなさい。」と怒られても付けることに抵抗があった。

去年の冬、治療の為に東京の病院に行く途中で新幹線が止まってしまふという出来事があった。私達が新幹線から降りた時には駅の待合室は人でいっぱい、座れる場所が全て埋まっているという状況だった。座れる場所がここにしかなかったたので仕方なく駅員さんに事情を話して別の場所に座らせてもらおうと母と相談していた時、近くに居たサラリーマンの人が私のかばんに付けていたヘルプマークに気づいて「座りますか？」と声を掛けてくれた。そのサラリーマンの人は明らかに疲れたような顔をしていて絶対に座ってはいたい筈なのに、私達に席を譲ってくれたのだ。私達が見て見ぬふりをしてしまふいような状況だが、そのサラリーマンの人は笑顔で

助けてくれた。さらに、そのやり取りを見た周りの人達も、万が一の時の為に用意していた車いすなどの荷物を置きやすいようにと動いてくれて、沢山助けてくれたのだ。私はその日、渋々付けていたヘルプマークのおかげで確かに救われたのだ。その出来事があった、私はヘルプマークへの偏見を反省した。確かにヘルプマークを付けていると自分は「障がい者です。」と言っているようなものというのは変わらないし、病気を患っていることを知って態度が変わる人もいるかもしれない。だが、これからはそれを悪いように捉えるのではなく、「困った時にすぐ助けを求めることができるお守り」というように良い物と捉えていこうと思った。

この経験からヘルプマークに興味を湧いて調べてみることにした。調べていくと二つのことが分かった。一つはヘルプマークは高校生の人が作ったという事。そして、もう一つは逆ヘルプマークの存在だ。逆ヘルプマークとはヘルプマークの反対で困っている人を助けたいという意思表示をする為のマークで、小学生が作ったそう。今では、逆ヘルプマ

優秀賞（岡山県教育委員会教育長賞）

「理解は優しさの第一歩」

ノートルダム清心学園清心中学校 三年

藤川 莉緒

ークは一部の学校や地域での普及が進み、ヘルプマークはメディアでのPRやポスター掲示などで認知度を高める活動もされている。私は、多くの人達がお金も時間もかけて、「困っている人を一人でも助けたい」と思っていることに驚き、心が温かくなつた。だが、悲しいことにヘルプマークも逆ヘルプマークも認知度がとても高いわけではなく、逆ヘルプマークについては知っていても持っていないという人が殆どというのが現状だ。だからこそ、私もヘルプマークや逆ヘルプマークの存在を知ってもらえるようにヘルプマークや逆ヘルプマークについて沢山勉強して将来、福祉関係の仕事に就きたいと思った。今、自分にできることは少ないかもしれないが、私のように偏見などから辛い思いや大変な思いをしている人が少しでもヘルプマークや逆ヘルプマーク、そしてみんなの理解で減っていったら嬉しいなと思う。



私は「触覚過敏」という特性を持っています。小さいころから服の素材で合わないものは肌が荒れてしまったり、強い不快感を覚えることがありました。とくに下着や靴下、首のまわりのきつい服は少し身につけただけでチクチクと痛がゆく感じ、服を着るのに一時間以上かかってしまったことが何度もあります。また、タグやゴムの締めつけも苦手で、着たいと思っても着られない服が数えきれないほど沢山ありました。

しかし、このつらさは見た目だけでは分かりません。幼いころの私はうまく説明が出来ず、まわりの人からは、

「わがままばかり言わないでちょっとくらい我慢し

なさい。」

と言われていました。きっとその言葉に反論しても理解してもらえない、「私がわがまますぎるだけなのかかもしれない」そう私は考えるようになりました。今は以前より着られる服が増えました。しかし、幼稚園や小学校低学年のころ、朝の着がえは私にとってつらい思い出しかありません。新しい下着を用意してもらっても肌に触れた瞬間にかゆくなり、泣きながら脱いでしまうことが毎日のようにありました。ある日母が忙しい朝に

「もう何でもいいから着て。」

と怒ってしまったことがあります。そのときの申し訳なさと、情けなさは、今でも心に残っています。学校生活でも困ることは沢山ありました。学校は決まった色の靴下をはかなければなりません。しかし、はける靴下がなかなか見つからず合う素材を見つけるのに苦労したり、制服のカーディガンやシャツがチクチクするのが苦手で幼稚園から小学校低学年のころは学校でもずっと泣いていて、保健室にいる記憶しかありません。まわりの友達が当たり前の

ように着ている服を自分は当たり前のように着られない。そんな自分が恥ずかしくて、「普通じゃない自分はいけないんだ」とずっと思っていました。

とくに伝わらなかったのは事情を知らない人からの誤解でした。

「服ぐらいでそんなにいやがるなんておかしいんじゃない？」

「どうせかまって欲しいだけでしょ。」

と言われたことがあります。その一言一言が私にとって大きな心の傷となりました。

そんな私の気持ちを少しずつ変えてくれたのはお母さんでした。買い物で服の試着をしているとき私が「この素材は苦手で着れないかも」と言うとお母さんは「分かったよ！着られるもの頑張つて一緒に探そうね」と言ってくれました。お母さんはきつと私に毎日泣かれてしんどかったと思います。しかし、私のことを否定することなく私の感覚を受け止めてくれました。これは私の心に温かく残っている思い出です。

他にも習い事で水泳をしていたときのことです。

私は濡れた体のまま服を着て肌に服がくっつく感覚がとても苦手でした。そのため着替えがいつもみんなの倍以上時間がかかっていました。まわりの子達はさつと服を着て更衣室を出る中、私は一人焦りながら着替えていました。そんなとき同じコースの友達が「ゆっくり待つとくよ！」と笑顔で声をかけてくれました。急かさず、からかうこともなく私のことを待つてくれている。その優しさは何気ないようで私にとつてとても嬉しい出来事でした。友達に支えてもらう中で、すべてを避けるのではなく「少し頑張ろう」と思うことが増えました。我慢することが大切という訳ではなく、無理の無い範囲で挑戦しようとするのが大切だと気付くことが出来ました。

私のように見た目では分からない特性を持ち、説明しても理解されず苦しんでいる人は沢山いると思います。でも、知ろうとする気持ちで救われる人がいると思います。

私は自分の経験を通して、見えない困難を持つ人が少しでも生きやすくなる社会になって欲しいと思

うようになりました。人はそれぞれ違うからこそ認め合い、配慮することが大切だと思います。これからは、自分の特性をバレないように隠したり、周りと違うことは悪いことで、恥ずかしいことという考えをやめようと思います。そして誰かが困っていたら、まずは「どうしたの？」と聞ける人になりたいと思います。なぜなら理解は優しさの第一歩だからです。



わたしの中の小さな違和感

岡山市立高島中学校 二年

池山 結彩

私には、小学六年生の弟がいます。弟は、小学校に入学したときから、特別支援学級に通っています。けれど、それは私にとって特に変わったことではありませんでした。

産まれたときから一緒にいて、弟の性格や苦手なこと、好きなことを私はよく知っています。だから「支援級に行く」と聞いても、「ああ、そうなんだ」と自然に受けとめていたのだと思います。

弟は大人数でいるのが苦手です。食べ物好き嫌いも多くて、給食が食べられない日もありました。以前はお弁当を持っていくことが多かったけれど、最近は少しずつ給食を食べられるようになって、お弁当の回数も減ってきました。そんなふうに、自分

のペースでがんばっている弟の姿を見てみると、「すごいな」と思うことがよくあります。

弟には得意なこともたくさんあります。たとえば絵や工作がとても上手で、学校の図工の時間に作った作品が表彰されたこともありました。自分の好きな世界を表現するのが得意で、私も感心することがよくあります。

最近では、弟のクラスに友達もできて、楽しそうに話す姿を見かけるようになりました。通常学級の授業にも少しずつ参加していて、

「今日の授業で発表したよ！」

「今日、みんなが僕の作品褒めてくれて嬉しかったです！」

と話してくれる日が増えました。そんな弟の笑顔を見るたびに、私はとても嬉しい気持ちになります。

そんな弟のことを、私は誇りに思っています。だけど、ある日、学校で耳にした言葉が、私の胸にひっかかりました。

「支援級って、頭が悪い人が行くんでしょ。」

「こいつ、支援級に行った方がいいんじゃない？」

その言葉は、私の弟に向けられたものではありません。しかし、そのとき私は弟の顔を思い出しました。そして、何とも言えない悲しさと、悔しさが心に広がっていききました。

支援級のことを何も知らない人が、「支援級」という言葉を、人をバカにするために使っている。そのことが、私にとってはすごくショックだったのです。

弟は、勉強が少し苦手です。でも、支援級に通っているのは「できないから」ではなく、「弟に合った学び方が必要だから」です。苦手なことがある一方で、得意なこともある。そのバランスを見ながら、一人ひとりに合ったサポートを受けられるのが支援級です。決して、「特別扱いされる人の場所」なんかではありません。

しかし、実際には、「支援級」劣っている。「かわいそう」というような偏見が、まだ多くの人の中に残っているのだと気づきました。

私は改めて考えました。人は誰でも、得意なことと苦手なことがある。それは支援級に通っているか

どうかに関係なく、当たり前のことです。勉強が得意な人もいれば、スポーツが得意な人もいる。人と話すのが苦手な人もいれば、一人で集中するのが苦手な人もいる。それなのに、ある一部分だけを見て「この人は劣っている」「この人はおかしい」と決めつけてしまうのは、とても悲しいことだと思います。

私は、弟のことを通して、人にはいろいろな個性や生き方があるということを知りました。そして、それを受け入れたり、理解しようとしたりする気持ちがとても大切だということも学びました。

これからも、弟や支援級に通っている子たちに対して偏見の目を向ける人がいるかもしれませぬ。そのたびに私は、きつとまた悔しい気持ちになるでしょう。また、来年、弟は中学校に入学します。今まではちがう環境の中で、きつとまた戸惑うことや、困ることもあると思います。でも、私は弟の一番の味方でいたいと思います。弟の良いところをたくさん知っている私だからこそ、できることがたくさんあると思うからです。

そして、周りの人にも伝えたいです。「ちがいは「おかしさ」じゃない。「ちがいは「個性」であり、「強み」であることもある。誰かたちがう部分を見つけたとき、「変だな」と思う前に、「それもその子らしさなんだな」と思ってみてほしい。そうすればきっと、見え方が少し変わると思います。

偏見をなくしたい。弟や支援級に通っている子どもが安心してのびのびと過ごせる学校や社会であってほしい。そのために、まずは自分自身が、偏見にとらわれずに人と向き合える人でありたい。そう強く思っています。



優秀賞
(株式会社山陽新聞社長賞)

違いを認め合うということ

津山市立中道中学校 二年

匿名

私はこれまでの学校生活の中で、人との違いに戸惑ったり、時には距離を感じたりしたことがある。小学校の頃、転校生がクラスに来たときのことだ。その子は外国から日本に来たばかりで、日本語もあまり話せず、班で話し合うときなど、とても大変そうだった。最初、私はどう接すればいいのかわからなかった。きつと、同じように感じていた友達もいただろう。放課後に彼が一人で校庭で遊んでいるのをよく見かけていた。

しかし、だんだん学校生活に慣れてきて、私は彼のことを少しずつ知っていった。英語の時間になると自信を持って発表していて、とても楽しそうに見えた。日本語も日に日に上手になり、少しずつ会話

がスムーズになっていった。

そして、何よりも印象的だったのは彼の笑顔だ。話しかけるとぱっと明るく笑ってくれて、その表情にこちらまで元気をもらえた。さらに、委員会の仕事などを一緒にしてみると、ユーモアのある楽しい人だということがわかった。最初は孤独そうに見えていた彼も、気付けば友達が増え、日本語で理解できる言葉もどんどん多くなっていった。

そして、同じ教室で過ごすうちに、自分とは違っていたけれど、魅力的な部分がたくさんあることに気付いた。最初は「違い」を壁のように感じていたのだが、時間がたつにつれて、それは新しい世界を知るための扉なのだと感じるようになった。それと同時に、彼も私たちに壁を感じずに楽しく心地よく過ごしているように見えた。

日本に住んでいる外国人の方々も同じように心地よく感じながら生活できているのだろうか。

総務省統計局のデータによると、二〇一〇年ごろ、在留外国人の割合は一・三パーセントほどだったが、二〇十四年には三・パーセントを超えるまでに増えて

いる。また、近年では前年比で十パーセント以上も増加している年もあり、外国人の存在は日増しに身近なものになっていく。将来的には、二〇七〇年には外国人の割合が十パーセントを超える可能性すらあると考えられている。私の母の職場にも在留外国人がいる。私の叔母の夫も外国人だ。

ある日祖父が、ある政党の演説をネットで見た後、私にこう言った。

「外国人は来てすぐに生活保護や失業給付がもらえるらしい。」

少し怒っていたので、調べてみることにした。失業給付は雇用保険に加入し一定期間働いた実績が必要で、生活保護は永住や定住資格などが必要だ。

祖父が言っていたことは、事実と異なることがわかった。祖父がなぜ間違っていて認識したのかはわからないが、とても危険だなと思った。日本に住んでいる外国人の多くの人にとって、危険感を抱くようなエピソードだと思った。

日本で外国人に対してヘイト感情を持っている人について聞いたことがある。理由は様々だと思うけ

ど、そのひとつに外国人の関わる事件が挙げられるのではないかと思う。ニュースで目にするのがあるので調べてみた。警察庁のホームページによると、来日外国人の犯罪が増加していて、犯罪内容は窃盗や詐欺、麻薬関連、匿名流動型犯罪などがあるようだ。日本人の犯罪もニュースで取り上げられるが、外国人の犯罪が取り上げられたら、国や文化が違うので、余計に怖さを感じる。

しかし、そういった一部の人たちの行いだけで、日本に住んでいる外国人すべてを差別したり、怖がったりするのは違うと思う。

人権を守ることは、決して特別なことではない。相手の立場を思いやること、違いを認めること、そして自分の言葉や行動に責任を持つこと。こうした小さな積み重ねが安心して暮らせる社会につながっていくのだと思う。

日本のことわざに「十人十色」という言葉があるが、これは世界中の人々にとって大切な考え方だと思ふ。もし一人ひとりが身近な違いを受け入れ、認め合うことができたなら、きっと大きな争いも少しず

つなくしていけるはずだ。

私はこれからも、誰かを自分とは違うと思つて距離を取るのではなく、「どうすれば分かり合えるか」と考えて行動したい。言葉や文化、考え方の違いを恐れず、互いに学び合えるチャンスだと前向きに受け止めたい。その積み重ねが、平和で思いやりのある社会をつくる第一歩になると信じている。



怖い言葉と自分の後悔

匿名

皆さんはこれまでの人生で、周りの人に、あるいはSNS上で人の命を脅かすような発言をしたことはありますか。

私が中学校に入学して周りの環境が変わったとき、他の学校から来た人達は、「死ね」とか、「殺すぞ」という言葉を息をするように言っていました。小学校ではその言葉に関わりが無かった私は最初にそれを聞いたとき、本当に怖いと思いました。いじりや一時の感情で発言をしているのかなと初めは思いましたが、一緒に学校生活をしていくうちに何も考えず、イラっとしたらすぐに出てしまう言葉なんだとわかるようになりました。

相手は会話の中で普通に使っている言葉なのに、私はどう考えても人を傷つける言葉としか思えませ

んでした。

自分の考え方がおかしいのか、発言している人がおかしいのか、わからなくなるときもありました。その言葉を聞くと、ぐるぐると考えるような日々が続いていきました。

それから数カ月たち、その言葉を聞いても何も感じなくなってきました。もう考えることに疲れ、考え続けても何も変わらないと思い、体が考えることを拒否しているような感覚でした。

そしてある日、私はその言葉を言ってしまった。今までだめだと思い、絶対に口にしないと決めていたのに、ついカツとなった瞬間に言ってしまった。言ってしまったなという思いと同時に、とてつもない後悔が押しよせてきました。自分が聞いて本当に怖かった言葉を、今、目の前にいる人にかけているんだ。その言葉を口にした自分がすごく怖いと感じました。

それからは歯止めがきかなくなり、気にくわないことがあると頭の中でずっと思っていたり、小声で言ってしまうこともありました。

本当はそう思っていないなくても、少しイライラしただけで周りの人にあたってしまうことが多くあり、クラスの人たちのことがわかったような感じがしました。

でも、だからといって人に向かって発言していいような言葉ではないし、気軽に言っている言葉でもありません。大切な命に関係がある言葉です。自分は周りにながされず、しっかりと考えて発言するようにしようと思いました。また、そう思うことができただけに、ほっとしました。

このような体験を通して、人権などに結びつけて考えてみました。人権とは人が人として生きられる権利のことで、この世界で生きている人達全員がもっているものです。そして、「生きる権利」という人権の中で最も基本的な権利があります。この権利があるため、私たちは生きることができています。

「死ぬ」という言葉は人の「生きる権利」をなくしているような意味だと私は思っています。実際に、そのことで命をおとした人がいると聞いたことがありました。そのことを知っていたので、余計にクラ

スの人たちの会話が怖かったのだと思います。

最近ではSNS上でも、誹謗中傷が増えていると聞きました。SNS上の誹謗中傷の怖いところは、直接言われるのとは違い、世界中のどこかの知らない人に言われているということです。誰かもわからない人に言われ、命を脅かすようなコメントをされたら皆さんはどう思いますか。私は絶対にたえられないと思います。そのため、自殺してしまう人も年々少しずつ増えているそうです。

また、「しぬしぬ界限」という界限も最近聞くようになりました。気になったので、調べてみると、「〇〇でしぬ」という感じで、感情が高ぶったり、普通の言葉では言い表せなかつたりしたときに使うそうです。最初に聞いたときはそれだけ感動しているんだなとポジティブに考えていたのですが、言葉の意味を考えると、少し受け入れられないなと思うようになりまし

た。いろいろなことを考えていくうちにわかったことがありました。私が一番怖かったことは、「生きていく権利」を失っていくような言葉が、日常にずつ

とあるということ。周りの人はもちろん、SNS上でも思ったことをだれが傷つくかも考えずにすぐ発言することはあってはならないと私は思います。

自分が発言した言葉がどれだけ重いのかわかったときに、私と同じように後悔してほしくありません。

一瞬イラッとしたときでも冷静になって、しっかりと自分の気持ちを考えることと、言葉の意味を理解することが大切だと思いました。私も後悔をしないように、周りの人に嫌な思いをさせないように、行動していきたいと思えました。



優秀賞（NHK岡山放送局長賞）

セルフレジと高齢者

津山市立久米中学校 二年

小田 将太郎

近年、スーパーやコンビニで「セルフレジ」を目にすることが多くなりました。自分でバーコードを読み取り、画面に表示された手順に従ってお金を支払う仕組みは、慣れてしまえばとても便利です。人件費を抑えられるというお店側の事情や、レジに並ぶ時間を短くできるという利用者側の利点もあり、あつという間に普及しました。ぼく自身も最初は少し戸惑いましたが、二、三回使ってみると手早く操作できるようになり、今では普通のレジよりもセルフレジを選ぶことが多くなりました。ところがある日、ぼくのおばあちゃんがセルフレジで困っている姿を見て、考え方が変わりました。おばあちゃんは七十歳をこえ背骨がまがり、身長があまり高くはあ

りません。ですがよく買い物に行きます。いつものように一緒に買い物に行きました。買い物かごを持ち、いつものように会計を済ませるだけだと思っていました。おばあちゃんは、

「セルフレジに行こうかな。」

と言いました。新しいことに挑戦するおばあちゃんを後ろから見守ることにしました。しかし実際に操作を始めてみると、すぐに困っていました。バーコードを読み取るうともうまく反応せず、画面に表示される文字も小さくて読みづらそうでした。後ろには次のお客さんが並び始め、空気がピリピリしてきます。おばあちゃんは焦って何度も操作をやり直しましたが、なかなか上手くいきません。おばあちゃんは慌てて

「ちょっとやって。」

と、言ってきました。ぼくは、すぐにいつものようにセルフレジをおわらせました。けれども、そのときのおばあちゃんは困っている顔をしていました。

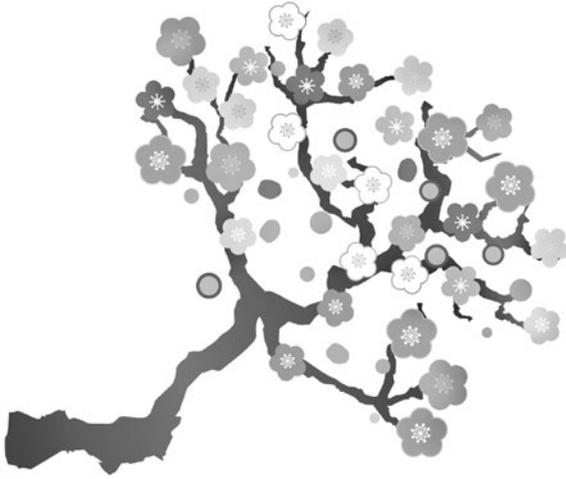
「やっぱ難しいな。」

と、つぶやきました。

セルフレジは確かに効率的で便利ですが、それは、「使いこなせる人」にとつての話です。おばあちゃんのように、視力が弱くなっている人や、機械に慣れていない人にとつては、逆に大きな不安を生むこともあります。社会が便利さやスピードばかりを追いつめる中で、取り残されてしまう人がいるのだと、身近な存在であるおばあちゃんを通して実感しました。人権とは、誰もが安心して生活できることを守るための大切な考え方です。買い物は日常生活に欠かせないものなのに、「使い方がわからないから不安になる」「迷惑をかけてしまうから買いたくない」と、思わせてしまう社会は、本当に優しい社会だろうか、と考えさせられました。もちろん、今の時代に有人レジだけに戻すことは難しいでしょう。人手不足や効率化は避けられない問題です。けれども、ぼくたち一人ひとりが「困っている人を急がさない気持ち」や「声をかける勇氣」を持つことが大切です。

あの日以来ぼくはセルフレジを使うときに、必ず周りを気にするようになりました。困っている人がいたら、少しでも助けになりたいと思うようになって

たのです。便利さを追求するだけでなく、誰かの歩幅に合わせる気持ちを忘れないことが、人権を守るということにつながるのだと学びました。



優秀賞（NHK岡山放送局長賞）

「こんにちは！你好！ミンガラバー！」

矢掛町立矢掛中学校 二年

藤 枝 季 菜

私が中学生となった今、日本は多文化社会になってきています。多文化社会とは異なる文化や民族を持つ人々が、互いの文化を尊重し合いながら共に生活する社会のことです。そのことについて改めて考えるきっかけとなる出来事がありました。

私の祖父、祖母、父が営む会社では外国人が働いています。私が生まれたときにはもう中国人が働いていました。私にとってはこの環境が当たり前で、文化の違う人達と共に過ごす難しさなどを考えたこともありませんでした。そんなとき、小学四年生の頃。新たにミャンマー人も働くことになりました。

会社では当たり前前に中国人同士が中国語で話をしていましたが、ミャンマー人とは中国語で話すわけ

にはいきません。初めの頃は日本語、中国語、ミャンマー語の三ヶ国語がたくさん聞こえてきました。そのとき私は、

「母国語ではない言葉を使うって難しいことなんだな。」

と気が付きました。母国語ではない言葉を使うには人一倍頑張らなければいけません。外国人が日本で暮らしていると、日本語で話す機会はたくさんあります。日本語を読み書きする機会は少ないようです。そのため私は会社で働く外国人のみんなに日本語プリントを作っています。日本語の持つ意味や日本特有の四季を感じ取れるようイラストなども添えています。初めてプリントを渡したとき、これは役に立つのかなと少し不安になりましたが、次に会ったときには、

「キナチャン！ベンキョウシテイマス！」

と色々書き込まれたプリントを見せてくれてとっても嬉しかったです。私が中学二年生になった今では、みんな日本語で一生懸命伝えようと頑張っています。

中国人もミャンマー人もいずれ母国に帰国する日がやってきます。それまでの間、仕事以外のことも日本の文化や行事にたくさん触れて、日本でもたくさん楽しい思い出を作り、帰ってほしいなと思っています。そのため私は折り紙を折ってプレゼントしたり、七夕にはみんなで願い事を書いて笹につるしたりします。日本の文化をより深く知ってもらいたいと考え、今年は短冊に切り絵を貼りつけてみました。中国人、ミャンマー人は喜んで願い事を書いてくれました。願い事を短冊に書くときに母国語ではなく日本語で書いてくれたときはとても嬉しいです。毎年七夕が近づくと、会社はみんなの願い事が書かれた短冊でいっぱいになります。これからも日本の行事や文化と一緒に味わいたいと思います。

私はみんなに教わるのがたくさんあります。一つ目は挨拶の大切さです。会社はもちろん、会社の外や休みの日に会ったときにも笑顔で、

「きなちゃん、こんにちは！」

と言ってくれます。きなという名前は海外の人が発音するには少し難しいことがあります。それにもか

かわらずみんな、私のことを名前で呼んでくれ、挨拶をしてくれるのが私にとってはとても嬉しい出来事です。私は言語によるコミュニケーションだけでなく、表情や態度による非言語的なコミュニケーションも大切だと気付きました。笑顔でコミュニケーションをとることで、相手に安心感を与えることができます。二つ目は文化の違いです。食文化や服装、価値観など、どの国も文化が一緒とは限りません。例えば日本では日常的に使われているジェスチャーの持つ意味や食事のマナーなど国によって変わってきます。異文化に触れるときには、視野を広げ、相手の文化を理解しようとするのが大切です。私は異なる文化を持つ人々と共存する多文化社会において、相手の文化の違いを理解するだけでなく、相手にも自分の文化を理解してもらう必要があると考えます。

国や民族が持つ文化一つ一つに様々な良いところがあります。私は中国人、ミャンマー人と話をするのがとても楽しいし、大好きです。中国人、ミャンマー人が人一倍努力し、頑張って覚えた日本語を使

い私に気持ちを伝えようとしてくれるとき、そして、私にその伝えたい気持ちが伝わりお互いが理解できたときはとても嬉しいです。これからたくさんの人たちとの出会いを大切にし、お互いの理解が深め合えるように日々の生活でできることを考えていきたいです。



大切な友

倉敷市立真備中学校 三年

平松 俊斗

僕はこの夏で部活動を引退した。なごりおしいが、卓球を通じて社会勉強もできた三年間、だったと振り返る。

一年生になった頃は不安や他校との人見知りなど複雑な思いで部活や試合を黙々としていた。

ある日の試合で僕と同じ歳だろうか、お母さんと二人で試合に来ている人がいた。体育館の片隅に座った。グループに入って話すこともなく静かに二人で片隅にいた。僕の母がその光景を見て、

「イスがありますよ。座りますか。」

とパイプイスを二脚持って行った。その親子は二人ともすごく笑顔で

「ありがとうございます。」

といい会釈をしていた。すると母が

「私も息子の試合で来てるの。何コートで試合なの？」

と聞くと一緒のコートで、対戦相手の一人だった。

僕は

「一緒にラリーする？」

と声をかけた。すると相手の子は少し照れたようにお母さんに隠れながらもいいよと返事をしてくれた。

そして、練習を終え少し休憩しようとしたときだった。

ん？その瞬間から僕の頭の中で、あまりジロジロ見たら駄目だということしか浮かばなくなった。今思えば多分、相手は僕の目を見て動揺している事に気付いて気を使ってくれたんだと確信した。

「僕、義足なんよ。」と彼は言った。

そうだ、僕も彼と同じようにストレートに心で思ったことを言ってみようと思ひ、

「ラリーをした時も全然わからなかった。教えてくれてありがとう。何か困ったことがあったら言っ

てな。」

と伝えた。ボールが違う方へ行けば僕は走って拾いに行つた。しかし、振り返ると彼は走って僕についできていた。思わず二人で笑つた。でもただ一つ気がかりな事があつた。卓球の会話はすごくするけど、学校生活の会話になると目を背け卓球の会話へと変えていた。

その時僕は気付いてあげられなかつた。

休憩場所へ戻ると、お母さん同士が仲良くなつていた。いきさつやきつかけは分からないが連絡先の交換をしていた。僕の母が、

「じゃあまたね。連絡待つてね。気を付けて帰つてね。」

とごく普通の会話をしていた。僕は帰りの車の中で母に

「彼は義足だつたんよ。でも全然僕らと変わらない。それよりか僕よりも努力しとるはずじゃ。」

と言うと母は

「もし連絡があつたら、あなたの考えでいいと思う。相談に乗つてあげて。」と言われた。この時彼が不

登校になつていた事など知らなかつた。

それから数日が経ち連絡が来た。もちろん卓球の会話だ。お互い気づけば一時間以上話していて、

「ごめん。明日学校であいさつ運動があるから、もう寝るな。」

と僕が言うと、「僕、学校行つてないんよ。」

と打ち明けてくれた。え？いや、これは電話を切つている場合じゃない。

「どした？言いくかつたら言わんでもええ。言える時がきたら言つてもいいし、学校へ行きたくないなら無理してまで行かんでええと思うよ。」

と告げた。すると、

「うん。分かつた。今なら言える。あのな、ゴミつて友達に言われたり、遠くへ物を投げられたりされて、学校が嫌いになつた。だから今こうやつて楽しくしてるけど、ゴミ扱いはされるんかなと思つて。」

と声が少しづつ小さくなつていた。

僕は怒鳴つた。

「僕のこと信用できん？でもな一回でいいけん信じてほしい。逆で僕は尊敬しとるよ。僕よりも人一倍

努力しとると思うから。」

この日を境に僕たちは、何でも話せる仲になった。学校に行ってみようと思った前日は連絡があり、学校へ頑張つて少しでも行けた日は「すげーな。」とほめて、今日一日の中でお互いに何かつらい事があつたら言い合うようにしていた。この世の中に一部の人だけだろうが、イジメはあつてはならない事だ。

僕はこの先、大人になるにつれて色々な人達と出会おうだろう。その時、苦しんでいる人がいたら少しでも寄りそい手を差し伸べてあげることのできる大人に僕はなる。



スポーツチーム特別賞（岡山シーガルズ賞）

将来の可能性を信じて

井原市立井原中学校 三年

久安歩未

『I型糖尿病42・195キロ挑戦』

二〇二四（令和六）年八月一七日の読売新聞に掲載された、ある記事が私の目に飛び込んできた。

プロ野球・阪神タイガースの選手として活躍した岩田稔さんが「大阪マラソン2025」で、大会スペシャルサポーターとして初マラソンに挑戦する。二十年以上前からI型糖尿病と戦う岩田さんは『病気であっても、何でもできるということを証明したい』と意気込んでいるという記事だ。

「私と同じ病気を抱えている人なのに、プロ野球選手として活躍していたんだ。しかも、フルマラソンに挑戦するなんてすごい！」私は食い入るようにその記事を見進めていった。

岩田さんは大阪・大阪桐蔭高校二年生の時、血糖値を下げるインスリンが十分に分泌されないⅠ型糖尿病を発症。阪神入団後も、一日数回のインスリン注射が欠かせなかった。マラソンのような長時間の運動をすると、低血糖で呼吸困難や失神などを起こす恐れがあり、水分に加え、ゼリー飲料などによる糖分補給が必要という。

「私と同じだ。日々の生活で、低血糖が心配な私と同じで、不安の中、日々生きている…。」私は、自分と岩田さんを重ねていた。

私は、小学校六年生のときに、Ⅰ型糖尿病を発症した。先の、岩田さんの紹介で、前述したように、血糖を下げるホルモンであるインスリンが膵臓から突然出なくなってしまう病気だ。いったん発症すると、膵臓移植を受けるか、生涯にわたって毎日数回のインスリン自己注射または、ポンプによるインスリンの注入を続ける以外に治療法はない。

そのため、私は、インスリンポンプをおなかに装着して、二十四時間、インスリンを体の外から注入することで生活している。食事の際には、これから

食べようとする食事の糖質量の分だけ、インスリンを事前に体に注入し、食事をしている。そして、低血糖になって体調が悪くなるのが日常茶飯事。低血糖を心配しながら生活を送ること、三六五日。「ああ、こんな生活もう嫌だ。」と思うことも度々ある。岩田さんが、マラソンの挑戦を決めたきっかけは、前年の大会で、Ⅰ型糖尿病を抱える知人が完走する姿を沿道で見届けたこと。岩田さんは、「めちゃくちゃ大変なこと。走り切った人に見えない景色があるはず。」と感銘をうけたそうだ。

「私と岩田さんの違いは、『挑戦する』か『挑戦しないか』だ。低血糖のことを恐れて、私は、部活とか挑戦できていない…。」私は、放課後学校に残ると、空腹時間が長くなり、低血糖を起こすため、それを恐れて、部活には所属していない。

岩田さんは、今も就寝中に低血糖に陥り、苦しく目が覚めるそうだ。それでも、新たな目標に向けて「同じ病気を抱える人たちに『岩田と同じ病気なら大丈夫』と思ってもらっただけでなく、一般の方にも病気への理解を深めてもらえるように頑張りたい

い。「強い決意でなにわ路を駆け抜ける。と、記事が締めくくられていた。

私は、現在、中学三年生。将来を考える岐路に立っている。進学する高校、大学、そして将来の仕事について、色々と考えなければならぬ時期になっている。

私は、岩田さんのように、『挑戦できる』人間になれるだろうか。私は、インスリンポンプを装着して生活しているため、就く仕事に、色々制限が出てくるのではないかと考えている。

放射線技師になりたいと思っても、磁気が発生するMRI装置には、インスリンポンプを装着したまま近づくことができない。だったら、放射線技師にはなれない。医師や看護師だって同じ、MRI装置で緊急の患者さんの対応をする場合を考えると、インスリンポンプを装着したまま近づくことはできない。このような考えが頭をめぐり、病気を理由に、自分の将来に見えない壁を作ってしまったている気がしていた。

そのようなときに、岩田さんの記事を読み、岩田

さんのように、『病気であつても、何でもできることを証明したい』という前向きな思いを持ち、生きていくことは大切だと思うようになった。病気ということを理由に、出来ないと思つて決めるのではなく、病気は自分の特性。将来の可能性を広げるか狭めるかは、自分の気持ち次第。挑戦することに見えない壁を作るか作らないかも、自分の気持ち次第。

私は、母と同じ、人々の健康を守る保健師になりたいと思つている。だからそのために、看護系の大学に進みたい。私にも、輝かしい将来があり、未知の可能性があると信じていたい。病気があつてもなくても、平等に職業を選択できる社会は、すでに目の前に広がっていると信じて、私は自分らしく生き、将来の可能性を信じて進んでいこうと思う。



自分らしく

津山市立中道中学校 三年

木多 優妃乃

「男の子なんだから泣かないの。」

小さいころ、私の母が兄に何度も言っていたのを耳にしたことがあります。そのときは、そういうものなんだと思っていましたが、成長する中で、なぜ男の子は泣いてはいけないのだろうかという疑問を持つようになりました。人の感情は性別で決まるものではないはずです。

そんなある日、ニュースを見ているときに「性自認」という言葉を知りました。それは、自分がどの性別であると感じるかという、自分の内面の感覚のことです。体の性と心の性が一致している人もいれば、そうでない人もいます。そして、その違いは誰にも否定されるものではないことを学びました。

私は、性自認が自分の体の性と一致しない友達の話聞く機会がありました。その友達は、クラスで制服の着方をからかわれたことがあったそうです。「女子はみんなスカートなのにあの子だけズボンで恥ずかしくないのかな。」

と笑われたとき、自分の個性をわかってもらえなくてとても悲しかったと言っていました。

私はその話を聞いて胸が痛みました。私が何気なく使ってきた言葉や態度が、もしかしたら誰かを傷つけていたかもしれないと気づいたからです。

人権とは、一人ひとりが自分らしく生きるために持つている大切な権利です。そこには「自分の性別をどう感じるか」も含まれているはずですが、しかし現実には、性自認が多数派と違うだけで、学校や社会の中で生きづらさを感じている人がいます。例えば、制服や更衣室、トイレが男女で分けられていることがその人にとって大きな壁になることがあります。

最近では、制服を自由に選べる学校や、多目的トイレを増やす動きが広がっています。実際に私の通

っている中学校でも前年度から制服がブレザーになり、様々な着方ができるようになりました。この動きはとても良い変化だと思えます。ですが、それだけでは十分ではないとも思います。制度が変わっても、周りの人の理解がなければ、その人が安心して利用することはできないからです。私たち一人ひとりが「その人の感じ方を尊重する」という気持ちを持つことが、何よりも大切だと感じます。

また、性自認の問題は、決して一部の人のだけのことではありません。誰もが「自分らしさ」について悩む時期があります。「男らしさ」「女らしさ」という枠にしばられすぎると、本当の自分を見失い、自分を表現することができなくなってしまう。性別にかかわらず、自分が好きな服を着たり、やりたいうことに挑戦したりできる社会こそ、多様性を認める社会だと考えます。

私はこれから「らしさ」という言葉を無意識に押しつけないようにしたいと思います。

そして、友だちや家族など身近な人が自分の性自認について話してくれたときは、否定せずに受け止

められる人でありたいです。相手の気持ちを変えようとするのはなく、「そう感じているんだね」と認めること。それが人権を守る第一歩だと信じています。

この作文を書きながら、私は改めて思いました。人権とは、誰かの特別な権利ではなくすべての人が持つている当たり前のものだということ。そしてその当たり前を守るために私たちには「知ること」「思いやること」が必要です。もし、身近な人が自分らしさを出せずに苦しんでいるのを見かけたら、私はその人に寄り添い、味方でありたいです。

自分らしく生きることを応援し合える社会。それは、性自認に限らず、すべての人が生きやすい社会です。私はそんな社会の実現のためにまず自分から変わり、周りにもやさしさの輪を広げていきたいです。



今日も誰かが大丈夫と嘘をついた

真庭市立久世中学校 三年

三 船 梨々華

「逃げることは悪いことじゃない」

そう聞いて、あなたはどう思いますか？

私は、この言葉を聞くたびに「本当にそう思っ
てくれる大人はどのくらいいるんだろう」と考えてし
まいます。

最近、母から

「自殺してしまつた学生の多くは、学校に毎日通つ
ていた子だ。」

という話を聞きました。その言葉に私はぞつとしま
した。どうして誰も、その子の苦しさに気づけな
かつたんだろう。気づいていたとしてもどうして逃げ
場を作つてあげられなかったのだろう。

「元氣そうに見えてた」

「楽しそうに話してた」

そんな『表の顔』だけを見て「うちの子は大丈夫」
と思つてしまう大人が多いのかもしれない。でも
子どもは親に、心配をかけたくなって、本当のこと
を隠そうとします。笑顔を作つて元氣を見せて、大
丈夫と言いながら泣きたくなる気持ちを押しこめ
て、学校へいく子がたくさんいると思います。

その子たちは、自分では逃げ出すことができない。
だからこそ、

「逃げてもいいよ」

「学校がすべてじゃないよ」

と言つてあげられる空気が必要なんじゃないかと思
うのです。けれど現実には、親もまた、「子どもの将
来のため」といつた不安にしばられているように感
じます。

「学校を休んだら周りにどう思われるか」

「不登校になったら将来に影響するんじゃないか」

そんな心配からもう少し頑張つてみようかと声をか
けてしまう。それが子供にとつて

「逃げ場をふさがれた」

と感じさせてしまっているかもしれません。

私自身かつて学校がたらくて、でも誰にも言えず、無理に明るく振るまつていた時期がありました。教室の空気や陰で言われる言葉に耐えられなくなってしまうしました。

「これくらいで休んじやだめ」

「親に心配をかけちゃだめ」

そんな思いがずっと頭の中にあつた私は、自分が逃げたことを責めて、ますます苦しくなっていきました。でもそんな私に母はこう言ってくれたのです。

「逃げてもいいよ、学校がすべてじゃない。」

その言葉で私は初めて自分を責めることをやめることができました。学校を休んだ日々は何もしていないように見えて私にとつては自分を立て直すために必要な時間でした。あの時逃げることを選んだから今こうして少しでも前に進めてるんだと思います。ありがたいことに今では私を理解してくれる優しい友達もたくさんできました。逃げたことは悪でも終わりでもなく自分を守るための成長の第一歩だったのです。逃げることは悪いことじゃない。私は

心からそう思います。

だからこそ私はこの作文を通してそんな大人たちに伝えたいと思いました。

「元気な子」

こそ目を離さないであげてください。

「何も言わない子」

が一番声をあげられずに苦しんでいるかもしれません。

「うちの子に限って」

と思わずに毎日一緒にいる子ども心の変化に少しでも目を向けてみてください。

どうか親が子供の逃げ道をふさぐことだけは絶対にしないでください。

いつか誰もが

「逃げて大丈夫」

と安心して言える社会になりますように。



ボランティアで気づいた大切なこと

新見市立大佐中学校 一年

葉村 大翔

ぼくは、今年の夏休みに三日間、知的障害者支援施設でボランティア活動に参加しました。これまで知的障害のある人と関わる機会がなく、正直なところ最初は大きな不安を抱えていました。実際にどのような人たちなのか、自分にはどんなことができるのだろうか、まだ分かりませんでした。施設へ向かう途中、車の中で「きちんと話ができるだろうか」と緊張していました。母に

「どう接したらいいか心配なんだけど。」

と話すと、

「何も、みんなと変わらんよ。いつものようにしたらいいよ。」

と言われ、（本当かな。）と思っていました。

一日目は木をはこびました。木は重く、汗をかきながら運んでいると、隣の利用者の方が「大丈夫？」と声をかけてくれました。僕は逆にこちらが助けなければと思っていたのに、励ましの言葉をもらって力が湧いてきました。その時に、胸の奥にあった緊張が少しづつほぐれていきました。作業を終えた後「ありがとう。」と言われたときは、自分が受け入れてもらえたような気がしてとても嬉しくなりました。

二日目には、利用者の方々との距離はぐっと近くなり会話も自然にできるようになっていきました。作業の合間に笑い合ったり、ちよつとした世間話をしたりと会話を楽しむ余裕ができました。

最終日は石灰石を使った筒づくりに参加しました。初めての作業、だったのでやり方が分からず戸惑っていたばくに、一人の利用者さんが「こうするとやりやすいよ。」と教えてくれました。その温かさ、に心を打たれました。障害のある人を「助ける存在」と考えていた自分の思い込みが違っていたことに気がつきました。むしろ僕の方が助けてもらい、支え

られていたのです。「また来てね。」と声をかけても
らったときは、とても嬉しかったです。初日に感じ
ていた不安や緊張はすっかり消え、障害の有無では
なく、一人の人として向き合える自分になっている
ことに気づきました。

三日間の活動を通して、僕は「人権は当たり前前に
尊重されるもの」ということを学びました。知的障
害のある人も、私たちと同じように日々の暮らしを
楽しみ、仲間と協力し合い、喜びや悩みを抱えなが
ら生活していると思います。僕はどこかで「障害が
あるから違う存在」と線を引いていたのだと思いま
す。その思い込みこそが、人の尊厳を傷つけてしま
うものなのだと思ってきました。

僕は「自分が何か役に立てれば」と思っただけのボ
ランティアに参加しましたが、実際には、励まされ
たり作業を教えてもらったり、笑顔で接してもらっ
たりすることで、自分自身が多くなりたいことを受け取
っていたのです。人権を尊重することは、一方的に助
けることではなく、互いに支合いながら共に生きて
いくことなのだと思ってきました。

今回の体験は、知的障害があるかないかで分けて
考えるのではなく、一人一人の個性を大切に、共
に歩んでいくことが人権を守ることなのだと
思います。これから僕は日常生活の中でも、周囲の
人を尊重し、相手の気持ちに寄り添える人になりた
いと思います。

僕はこの三日間のボランティアを通して、大きな
気づきや多くの学びを得ることができました。この経
験を忘れず、どうか少しでも考えながら生きて
いきたいです。



本当の気持ちに気づいた日

匿名

私の友達に、クラスで「いじられキャラ」として親しまれている子がいます。その子は明るくて、どんなことを言われても笑って返します。だから私は、どんなにからかわれていても気にしていないと思っていました。

ある日、その友達ともう一人の友達と3人で遊ぶ機会がありました。おしゃべりをしたり、化粧をしたりして、楽しく過ごしていました。私はふとした会話の中で

「Aちゃんって強いよね。いつも笑って返しててすごいな。」

なんて、軽く言いました。すると、その子は少し黙って、ぼつんと言いました。

「最近、Bちゃんに外見のこといじられて、ちょ

っと悲しいんだよね。」

私はビックリしました。Aちゃんはクラスでも人気があって、みんなを笑わせるような存在です。

「顔おもしろい」とか「魚みたい」と言われているのを私も見たことがあります。いつも笑いながら返しているから、まさか本当は傷ついていたなんて思ってもみませんでした。

「でもいつも笑っているじゃん？」

と私が聞くと、

「うん、笑っているけど、ほんとうはちょっとイヤなときもある。でも、イヤって言ったら、空気悪くなるかなって思ってた。」と、友達は言いました。

私は言葉が出ませんでした。胸がぎゅつとなつて、悲しい気持ちになりました。私は、「いじり」は仲のいい証拠だと思っていたしまわりが笑っていればそれでいいと思っていました。でもそれは、相手の気持ちをちゃんと見ようとしていなかっただけでした。

その日から、「いじり」はふざけ合いに見えるけど、どんなに軽くても、言われた人がイヤな気持ちにな

るなら、それはもう冗談じゃないと思います。

たとえば誰かが失敗したときに、「またミス？ほんとドジだな」と笑う場面があります。言われた本人が笑っていても、心の中では傷ついているかもしれない。私自身もテストで悪い点を取ったとき、「マジでやばくね？」と笑われたことがあります。そのときは笑って返しましたが、本当はたくさん勉強したのにと、悲しくて泣きたくなったのを覚えています。

でも私は、その気持ちをすっかり忘れていました。別の子がいじられていたのを見ても「あの子なら大丈夫」と思い込んでいました。

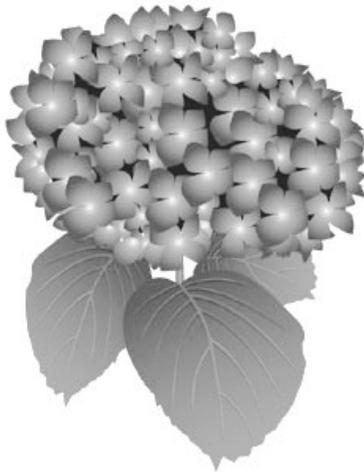
それがどれだけ無責任だったか、今はよくわかります。

「いじられることに慣れてる人」なんて本当はいないのかもしれない。笑って見せているだけで、心の中で我慢している人もいます。だから私は、これからはもっと「ほんとうの気持ち」に気付ける人になりたいと思いました。

そして、自分が話す言葉にも気をつけたいです。

何気ない一言が、相手の心に残ることもあります。だからこそ、やさしい言葉を選んで、人を安心させられるような人になりたいです。

人の心は見えません。でも、だからこそ、想像すること、思いやることが大切だと感じました。あのとき友達が話してくれた「本当の気持ち」を、私はずっと忘れません。そしてこれからも、相手の気持ちを大切にして行動できる人でありたいと思います。



「自分らしく」「でいいじゃん

倉敷市立玉島東中学校 二年

滝 澤 陽奈乃

私は小学生のころから、声が大きく、じっとしているのが苦手だった。

思ったことはすぐに口に出してしまうし、休み時間はいつも誰かとしゃべって笑っていた。何もしてない時間が退屈で、廊下を歩いている先生を見つけては話しかけに行ったり、授業中でもついおしゃべりをしてしまったり。まわりからは「うるさい子」と思われていたのかもしれない。

そんな私に、ある日友達の方がこう言った。

「陽奈乃って、ちょっと問題児だよね。」

冗談のつもりだったのかもしれない。でも、私はその言葉に深く傷ついた。「問題児」なんて言われたことがなく、自分がみんなの迷惑になっているの

かと考えこんでしまった。

その日から、私はできるだけ静かにしようと思った。声を小さくしたり、話したいことがあってもぐつとこらえたりした。大きな声で笑うのも我慢した。けれど、自分を抑えるはとも苦しかった。もやもやした気持ちが胸にたまって、何かを我慢している自分にだんだん疲れていった。友達と話していても、前みたいに楽しいと思えず、心の中はずっとさみしかった。

そんな私の変化に気づいてくれたのは、担任の先生だった。

ある休み時間、先生が声をかけてくれた。

「最近元気ないね。何かあった。」

私は正直に話した。

「うるさいって言われて、ちょっとでも静かにしようと思ったんです。」

先生はにっこり笑いながら言った。

「元気すぎるぐらいが陽奈乃らしくていいんだよ。人と違ってもいいんだ。静かすぎるのも、それはそれで大変だと思うけどね。」

その言葉に私はほっとした。誰かに自分のままでいいと言われることが、こんなにうれしいなんて思わなかった。

それから、私は少しずつ自分を大切にしようと思った。自分の声や明るさを隠すのではなく、時と場所を考えて、それを生かすことにした。

例えば、授業中は静かに集中することを心がけ、友達と話す時間には元気よく話すようにしている。そうすることで、私らしさを失わずにいられるのだと気づいた。

中学生になって、私は「自分らしくいる」ことをもっと意識するようになった。小学生のときは「うるさい」と言われて自信をなくしたが、先生の言葉を思い出してからは、無理に自分を抑え込まないように心がけている。

授業中は静かに集中しつつ、友達と話すときは元気よく話す。部活動や学校のイベントでは、自分の明るさや元気を活かして、仲間と楽しく過ごしている。友達も私のことを理解してくれて、ありのままの自分でいられることが増えた。

もちろん、時々周りから「うるさい」と言われることもあるが、それでも自分の個性を大切にしていることが大事だと感じている。

人にはそれぞれ個性がある。性格、考え方、得意なこと、苦手なこと。みんなが同じである必要はないし、違うから面白いし、お互いに学べる。

しかし、世の中には、個性を理解してもらえず悩む人も多い。例えば、声が大きいただけで「迷惑だ」と言われたり、見た目や話し方が違うだけで仲間はずれにされたりすることもある。

それは、とてもつらいことだ。私もあのとき、問題児と言われたことで、ひどく悲しい思いをした。だからこそ、私は思う。誰もが自分の個性を大切にできる社会になってほしいと。

個性を尊重することは、人権の基本の一つである。人権とは、一人一人が「自分らしく生きる権利」を守ることであり、他の人の個性も認め合うことがその根本にある。

私もまだまだ完璧にはできない。つい自分を抑えなくなることもあるし、失敗して落ち込むこともある

る。だが、先生の言葉を思い出しながら、自分の個性を受け入れ、人にも優しく接したいと思っっている。これからも私は元気いっぱい自分でいたい。時にはうるさいと言われるかもしれないけど、それは私の一部だ。そして、同じように悩む誰かがいたら、「そのままでもいいよ」と言っただけで、あきらめられる人になりたくない。

人はみんな違う。それは間違いではなく、世界を豊かにする大切なことだ。

だからこそ、一人一人が自分の個性を大切に、他の人の個性も尊重できる社会になってほしい。そう思いながら、これからも自分らしさを大切にして、生きていきたい。



最優秀賞受賞者へのインタビュー

宮崎りのさんへのインタビュー

令和七年二月二三日

岡山白陵中学校

(木元委員) 宮崎さんの作品は、岡山県大会において、「岡山地方法務局長賞（最優秀賞）」を受賞しました。この度は誠にありがとうございます。

(宮崎さん) ありがとうございます。

(西村委員) 最優秀賞の受賞を知らされたときのお気持ちを聞かせてください。また、ご家族の方の反応はいかがでしたか。

(宮崎さん) 最初は信じられず驚きました。自分なりに考えて書いたので、まさかとは思いましたが嬉しかったです。家族はとても驚いて喜んでくれました。

友達は「おめでとう」と言ってくれました。

(宮崎さん)

授業で習ったアンコンシヤスバイアスです。身近にある人権の問題だと思います。友達と話していると、家でのルールが違ったり、当たり前が違ったりすることがあります。自分の考えを見直していきたいと思いました。

友達は「おめでとう」と言ってくれました。

(木元委員)

まさに題名のとおり「違い」は「壁」ではなく「橋」ということですね。

(宮崎さん)

車で聴いていたラジオと、家族で行ったお寿司屋さんがきっかけです。私は、性別や国籍で物事を判断しないと思っていました。自分が性別で役割を決めたり国籍で相手のことを考えたりしていたことに気が付きました。思い込みをしていた自分に気づきました。

(宮崎さん)

大勢の人の前で朗読することは初めてで、すごく緊張しました。会場の人が静かに耳を傾けてくれると思い、無意識の偏見について考えてほしいと思いながら読みました。

(西村委員)

無意識のうちに積み上げられた偏見と、こうあるべきという思い込みが自分の中にあることに気づき、作文を書くきっかけになったのですね。

(西村委員)

緊張の中でも落ち着いて読めていましたよ。

関心のある人権課題はありますか。

宮崎さんの将来の夢は決まっていますか。

(宮崎さん)

気象予報士や地震にかかわる仕事に就きたいと思っています。正しい情報を伝えることで一人でも多くの人を助けたいです。家族も応援してくれています。

(西村委員)

最後に、宮崎さんが考える人権とはどのようなものですか。

(宮崎さん)

人権とは誰もが自分らしく自由に生きる権利のことで、当たり前前に大切にされるべきものだと思います。そのためには、無意識の偏見について立ち止まって考えることが大切だと思います。

私は人権が尊重されるのを待つのではなく、そんな世界を作る側になりたいと思っています。

(西村委員)

作文の中にある「正しい目」を持ち続ける人でありたいということですね。本日はありがとうございました。



宮崎さんと西村委員、木元委員

くインタビューを終えてく

師走を迎えた一二月二三日、学校全体が静寂に包まれる一五時頃、岡山白陵中学校を訪問しました。

応接室で待っていると、担任の先生とともに宮崎さんが入ってこられました。芯の通った文章、多様な言葉を使った説得力のある内容、何度読んでも共感できる事柄。ここで出会った宮崎さんは、笑顔の素敵な落ち着きのある中学生でした。「書くことが好きですか」の質問に、「夏休みに他の作文コンクールにも応募したようです」と担任の先生。電車通学で、その間お友達とお喋りをしたり読書をしたりしているとのこと。読書好きがこのようなしつかりとした作文を書くことにつながっているのかなと想像しました。

「外国の方が握られたお寿司、美味しかったですか」の問いに「美味しかったです」と瞬時に嬉しそうに答えられた宮崎さんでした。その美味しさに「外国人がお寿司を…」の固定概念が一気に吹き飛んだのでしよう。

身の回りの人権問題にも小学生の頃から関心をもっていると話されました。「両親と人権について

話す機会が多いです」と一言。家族の会話の中でごく普通に人権課題について話ができる環境にあるのでしよう。

はにかみながらも「自分らしく生きられる社会、それを願うだけではなく、作る側に立ちたい」と語ってくれました。読書をしたり、友達と意見交換したり、学校での学びなどで、前向きに物事を考える今の姿勢を持ち続けながら、夢に向かって進んでほしいと思いました。

学期末のお忙しい中、最後まで宮崎さんに寄り添ってくださった先生方に感謝いたします。

岡山県人権擁護委員連合会

西村洋子・木元妙子



最優秀賞受賞者へのインタビュー

慶田元 杏さんへのインタビュー

令和七年二月二日

岡山学芸館清秀中学校

(木元委員)

慶田元さんの作品は、岡山県大会において、「岡山県人権擁護委員連合会長賞

(最優秀賞)」を受賞しました。この度は、誠におめでとうございます。

(慶田元さん)

ありがとうございます。

(木元委員)

受賞を知らされたときの気持ちや、家族や友人の反応はどうでしたか。

(慶田元さん)

私は作文を書くのが苦手で、今回も時間をかけて書きました。受賞したと聞いてとても驚き、実感がわきませんでした。家族はとても喜んでくれ、山陽新聞に作文が載ったとき、四部購入し

(木元委員)

皆さん温かい言葉をかけてくださったのですね。

では、今回の人権作文を書いたきっかけについて教えてください。

(慶田元さん)

年に二回、病気の治療のために東京へ行っています。そのとき、東京にはヘルプマークを付けている人が多く、啓発するポスターもたくさんあることに気が付きました。作文で出てきたサラリーマンの人はヘルプマークを知っていました。岡山はポスターもヘルプマークを付けている人も少ないと思います。岡山にもヘルプマークを広めたいと思ったのがきっかけです。

(西村委員)

多くの人に知ってもらい、助け合いが自然にできる社会になるとよいですね。近年、インターネット上での人権侵害などが問題となつていますが、慶田元さんは興味のある人権課題はありませんか。

(慶田元さん)

リハーサルでは、緊張して嘔んでしまい、焦りましたが、本番は緊張しつつも自信をもって朗読できました。担任の先生と古文の先生が、放課後学校で練習に付き合ってくださいだったので、その成果が出せたと思います。

(慶田元さん)

献血に興味があります。私は、献血のおかげで生活できています。ところがコロナ禍から献血をする人が減っています。私のように献血が必要な人が多くいるはずです。献血で命をつないでいる人が安心して生活ができるようになれば良いと思います。献血について知ってもらうために知識を増やしたいと思つています。

(木元委員)

堂々とした態度で良かったですよ。作文にも書いておられました。将来の夢は決まっていますか。

(慶田元さん)

作文では福祉関係の仕事に就きたいと書きましたが、変わってきています。私は数えきれないほどの助けもらった経験があります。将来は人を助ける仕事に就きたいと考えています。まだ考える時間はあると思うので、じっくり考えて、自分の得意なことを伸ばしていきたいです。

(木元委員)

献血の重要性について広く知ってもらうことが大切ですね。

それでは、「ハートフルフェスタ2025おかやま」で作文を朗読した際の感想を教えてください。

(西村委員)

慶田元さんが考える「人権」とは、どのようなものですか。

(慶田元さん)

みんなが楽しく過ごせる環境だと思えます。差別がないことはもちろん、無関心よりは知ってもらいたいと考えています。そして、知ったうえで普通に接してほしいです。

(西村委員)

作文には、ヘルプマークを「困ったときにすぐ助けを求めることができお守り」として考えるとありました。ヘルプマークへの抵抗感はなくなりましたか。

(慶田元さん)

今はヘルプマークに抵抗感はありません。遊び用のかばんにも付けています。これまで母は私を一番助け、寄り添ってくれました。母から渡されたヘルプマークは、母が自分のことを思ってくれているという証なんだと思えるようになりました。

(木元委員)

「助けてください」「大丈夫ですか」「何かできることはありませんか」と互い

に言える、思いやりがいっぱい社会を作りたいですね。今日はありがとうございました。



慶田元さんと西村委員、木元委員

「インタビューを終えて」

師走の一二月二三日、岡山学芸館清秀中学校を訪問しました。玄関には「えがおで あいさつ」の書が飾られ、出会う生徒さん達の「こんにちは」の声に出迎えられ、慶田元さんのインタビューに向かいました。

「緊張しています」と第一声。でも、満面の笑顔で、どんな質問にも気持ちよく答えてくださいました。「はい」「ありがとうございます」と相手の話を受け入れながら、はきはきと語る明るい中学生でした。自分が抱えている病気について話すと、素直に受け止めてくれる友達、作文朗読の練習に付き合ってくださいる先生方、慶田元さんの夢を応援してくださいる家族。周囲の人々に恵まれ、毎日がとても楽しく充実していると語る笑顔は輝いていました。「特に母には感謝しています」と一言。

この作文を書くために、再度ヘルプマークについて調べたそうです。ヘルプマークは「困ったときにすぐ助けを求めることができるお守り」、逆ヘルプマークは「困った人を一人でも助けたい」という支える側の視点。SOSを発する側と「何かお手伝い

しましうか」と言える側との思いやりのある社会。その実現のためにも、慶田元さんの作文、「ヘルプマークの存在」を多くの人に読んでもらいたいと強く思いました。

東京で出会った人々の温かい行為と、作文を書くことで、抵抗感なくヘルプマークを付けていますと語っていました。「作文を書くことが苦手だったけど、少し自信ができました」この一言に慶田元さんの強さを感じました。

慶田元さんの探している「得意なこと」が見つかり、一步一步前に進まれることを願っています。

岡山県人権擁護委員連合会

西村洋子・木元妙子



岡山県大会審査結果については、岡山地方事務局のホームページにも掲載しています。

<https://houmukyoku.moj.go.jp/okayama/>

ひとりで悩まずにご相談ください



人権イメージキャラクター
人KEN まもる君



人権イメージキャラクター
人KEN あゆみちゃん

人権に関する問題でお悩みの方は、お近くの法務局・地方法務局
又はその支局までご相談ください。

電話でのご相談

- みんなの人権110番（全国共通 0570-003-110）
- こどもの人権110番（全国共通・通話料無料 0120-007-110）
- 外国語人権相談ダイヤル（全国共通 0570-090911）

SNSでのご相談

○LINEじんけん相談

以下の検索ID・二次元コード等から公式アカウント「法務局LINEじんけん相談」を友だち追加の上、ご相談ください。なお、相談内容を入力する前に「ご相談はこちら」をタップしてください。 検索ID:@snsjinkensoudan



インターネットでのご相談

○インターネット人権相談受付窓口（24時間受付）

パソコン、携帯電話、スマートフォンからインターネットを利用して、いつでもアクセスでき、相談を行うことができます。

<https://www.jinken.go.jp/>



ミニレターでのご相談

○こどもの人権SOSミニレター

いじめ、親からの虐待など、先生や保護者にも話せない悩みごとのご相談に応じ、解決に導きます。



禁無断転載

※本作品集の作品を地方自治体が広報誌に掲載したり、学校が教材に使用される場合などには、下記に御連絡ください。

〒700-8616 岡山市北区南方一丁目3番58号 岡山地方事務局人権擁護課 TEL(086)224-5656(代表)

